

まちとアート



りが主導して実施した「まち」と「アート（トリエンナーレ）」をつなぐまちトリ岡崎プロジェクト（以下、まちトリ）。まちトリが担った「まちなか展開」では、これまでのまちづくりでは成しえなかった、新たな地域住民同士のつながりや百人百景などのまちづくりの手法を見出すことができた。

岡崎では、みちくさガイドツアーやワークショップを実施するだけでなく、空き店舗を活用した案内ステーションの設置や空き駐車場のシェアリングによって来場者に飲物を提供する移動販売車の誘致、オカザえもんを媒介した商店街の経済活性化支援に加え、各店主のまちへの思いや愛着をつなげ、これまでの連携関係を深めるツアー企画の実施など、トリエンナーレのインパクトをいかに受け止め、どう活かしたらよいかを模索していたまちの担い手に対して、活躍の場を提供することができたことも本事業の成果と言える。

岡崎会場は主要駅である名鉄東岡崎駅と中心市街地が離れ、展示会場も距離があったこと、また、名古屋のような大都市と比して、魅力の集積度や情報の密度が薄いことが、ガイドツアーのニーズにつながり、訪れる人に対して地元ならではの情報提供が可能となり、効果的にまちの魅力を、結果としてツアーやワークショップにおける参加者人数も想定以上の数字を記録した。

トリエンナーレには、アートをまちの中で展開することにより、その場所の文脈や環境、その地で暮らす人々の力と作品が呼応することで、まちがアートの力をもたらす効果と、アートがまちの本来持っている潜在的な魅力を浮かび上がらせる効果があり、それぞれの質が高いほどその相乗効果は高まる。今回、岡崎チームは「営みの痕跡」というキーワードを掲げ、ツアー企画やみちくさ案内図の作成や百人百景のプロジェクトを実施した。その中で、アートという平時のまちにとって非日常的なものの魅力と、アートと無関係と思われがちな日常的な営みやまちなみを対置し、市民や来場者参加型の多様なプロジェクトのしかけを通じて、岡崎ならではの「営みの痕跡」を再発見

し、現在の営みの質を高めていくことが将来のまちの価値を高めるという気づきを得ることができた。また、これまで歴史というと、書物に示されているような先代が築あげてきた「過去の静的な歴史」をとらえられがちだったが、本事業では、より身近で今を生きている「これからの動的な歴史」を再発見することができた。

まちトリの「まちなか展開」は、数字や文章、写真などの記録のみならず、まちの人たちや訪れた人たちの記憶として残り、この地でトリエンナーレが開催されたことが、これからの歴史の「コマ」として刻まれていくだろう。

(Y+A)

66

Litaracy

まちのミカタ

Litaracy

2013.11 vol.66

発行・編集

特定非営利活動法人 岡崎まち育てセンター・りた

〒444-0072 岡崎市六供町字杉本78-1

TEL (0564) 23-2888 / FAX (0564) 23-2898

<http://www.okazaki-lita.com>

<http://www.facebook.com/okazaki.lita>

配布

岡崎市図書館交流プラザ・Libra / 岡崎市内の地域交流センター
会員宛へ郵送 等 ※会員登録をご希望の方は左記までご連絡ください。

配布協力

Ragslow / 垂cha:l a / 森の花畑 / FMおかざき / 松應寺 /
杉くんの駄菓子屋 / FURA gallery / angel share /
長善館 / cafeくらがり / コミュニティ・ユース・バンクmono /
三河サドベリースクール シードーム



忘れちゃいかんこと

25年9月、初めて東日本大震災の被災地である宮城県仙台市と南三陸町、福島県南相馬市を訪れた。今回はそこで見た光景をお伝えしたい。

はじめに訪れた仙台市は名古屋に勝るくらい栄えており、震災のあった東北に来ているとは思えないほど平常を取り戻しているようだった。仙台から南三陸まで車で1時間半。途中から1車線になったものの高速道路も開通しており順調に復興が進んでいる様子がかがえた（昨年は3時間強かかったと後から聞いた）。

南三陸に着くと「復興」という文字が頭から消えた。なにもかもなくなったままだったからだ。次の日に訪れた原発20km圏内ぎりぎりの南相馬では、住める状態の建物はあるのに人が1人も歩いていなかった。いずれも「まち」がなくなっていた。

2年半以上たった今でも、まちの中心部から離れると道のガードレールは曲がったまま、そこになかったはずの家や車、コンクリート塊が放置されていたりなど、震災から数ヶ月後にテレビで見た光景がそのまま残っていた。それどころか、川の水面が見えなくなるほど伸びた堤防の

草が橋を覆いそうだったり…。そこかしこにある草木に覆われた丘をよく見るとそれは震災がれきの山だったり…。そんな中でも、今なおボランティアに来てくれている外国人がいること、小さいながらも商店街を再開して交流の場を作ろうとしている人がいることなど、素晴らしいこともたくさんあると知った。

最近の震災関連のニュースといえば原発一色で、順調に復興が進んでいるような錯覚に陥るが、実際は全然進んでいるようには思えなかった。国の対応がどうか、原発がどうか大きなところの議論ももちろん大切だ。でも、忘れちゃいかんことがたくさんあるということを出していただきたい。意識しなくなっただけで、意識して周りを見ると震災復興募金などの地道な活動は今でも多くの場所で見られる。遠く感じる東北は、名古屋から仙台まで新幹線なら3時間半で行くことができる。現地ボランティアは確かにハードルが高いが、観光で訪れることも立派な支援だ。

今一度、被災地のことを見つめなおして、自分にできることはなにか考えてみませんか？ (H)



最後に選択した商品や行為はどのようなものであっても、その結果に至るまでのプロセスの中で生まれた個人の価値観への気づきや意味を、一つの物語としてステイトメント（表現）する。

まちづくりは「生活芸述」の視点から始まる。

岡崎って、どんなまち？ ～ふりかえれば未来～

市役所に勤める中学時代の同級生と、喫茶店で久しぶりにひと時を過ごした。彼と会うのはいつ以来だろう。彼も私も岡崎のまちづくりに少なからず関わっていることもあり、自然と会話の中心はこのまちの話題になった。

「岡崎って、一体どんなまちだろう？ ジャズだったり、徳川家康だったり、味噌だったり。最近はオカザえもんも…。いろいろあるけど、結局どういうまちをめざせばいいのだろう？」
そう聞かれて、ちょっと迷ってしまった。岡崎には地元を愛してやまないような人が結構いて、みんなこのまちをよくしようと様々な取り組みをしている。それぞれ素晴らしい取り組みだと思うけど、まち全体としてみると何が柱なのだろう？

彼と別れてしばらく考え込んだ。まちで考えると分かりにくいけど、例えば個人に置き換えてみるとどうだろう。「あなたはどんな人ですか？ どんなことをしたいのですか？」
そう聞かれたとすると、どう答えるだろう。自分が何をしたいのか、何をすべき

なのか。これは昔よく聞かれ、考えたことである。就職活動や転職活動をしている二十代の頃、この質問を何度自分に問いかけたことか。結局、自分の生まれた環境や幼い頃の原体験を見つめることでしか、自分の選択の道は見出せなかったなあ。
そう思うと、まちもやっぱり、このまちが刻んできた歴史のようなものを見つめることでしか、進む道を探せないように思う。幸い、私のまわりには岡崎の歴史に関心の高い人が多くいて、このまちが全国津々浦々のまちと社会をつくってきた源であることを教えてくださる。歴史をふりかえれば、岡崎のアイデンティティや「らしさ」が見え、それを基軸にして、まちのありようのようなものが見えてきそう。たとえ岡崎には目に見える歴史や文化的な資産は少なくとも、無形の財産がたくさん転がっていることに気付かされる。

・・・次に彼に会うときには、先日よりも少し深い話ができそう。

(K)

